

# 長嶋監督の梗塞部位と映画「ミクロの決死圏」

堀江 幸司（東京女子医科大学中央写真室）

長嶋茂雄（読売巨人軍終身名誉監督）が、心房細動から心房内に血栓を生じて、それが左大脳に飛んで脳梗塞（心原性脳塞栓症）を起したのは、3月4日のことでした。主治医となった内山真一郎教授（東京女子医科大学・神経内科）の記者会見によると、梗塞を起した部位は中大脳動脈ということです。たまたま、私は、**シソーラス研究会**のホームページの「HyperMeSH」で、心臓・血管系の解剖学用語を取り上げて執筆中でしたので、左心房内にできた血栓が、どのような経路（動脈）を通過して中大脳動脈に達し梗塞を起したのか、ある程度イメージすることができました。

そこで、思い出したのが、映画「ミクロの決死圏」です。脳内出血を起した亡命科学者のためにからだの内部から脳外科手術を行う。そのために、脳外科医、その美人助手、循環器専門医（医務部長）、潜水艇の艦長、そしてアメリカ特別情報部員の計5名が、特殊潜水艇に乗り込みミニチュア化されて、頸動脈から脳内に送り込まれるというSF映画の最高傑作です。長嶋監督にも、このような治療ができないものか、と夢のようなことを考えたのです。

## 「ミクロの決死圏」：注入部位の取り違い

「ミクロの決死圏」は、40年近くも前の映画ですが、その体内の美しい映像とアイディアには、眼を見張るものがあります。45億3千6百万円という製作費をかけたというだけのことはあります。

手術前の打ち合わせで、医務部長（循環器専門医）は、オーバーヘッド・プロジェクターを使って動脈系の全図を示し、潜水艇の注入部位と、脳内にある血塊までの経路、そして術後、潜水艇を救出する静脈系の部位を説明しています。

2回目にDVDを観ているときに、手術室内で亡命科学者に注射器で潜水艇を注入している部位が、手術前の打ち合わせとは違う右総頸動脈であることに気がつきました。

確認のために何回か繰り返して見たのですが、血塊に近い左総頸動脈から注入すべきところを右総頸動脈から潜水艇を注入しているようです。映画のセリフでは、注入部位を頸動脈（Carotid artery）としていて、左右を区別してはいないようでした。

映画は、そのまま進んで、右総頸動脈に注入された潜水艇を動脈図の上で追跡モニターしています。画面上は、左右の総頸動脈の取り違いに気がつかずに進行します。

そこから、どのような経路を通過して左大脳内の血塊に到達するのか、注意して見ていました。

右総頸動脈から注入された潜水艇は、内頸動脈と外頸動脈への分岐部の辺りで動脈と静脈の動静脈吻合を通過して静脈系に入り込んでしまいます。

その後、潜水艇は、一時的に心停止させた心臓に、上大静脈から右心房に入り、三尖弁を抜けて、右心室に向かいます。心室内の肉柱や腱索なども、よく表現されています。

右心室から肺動脈弁（半月弁）を抜けて、肺動脈に入ります。肺動脈は、肺に繋がっている訳ですから、左心房にもどらないで、どのように脳内に向かうのかと想像していたら、肺からリンパ系に移って、左大脳内に向かう経路を選択していました。

最近の新聞報道によると、長嶋監督は、リハビリ専門施設に移られ、リハビリに励んでおられるようです。家族の温かい見守りなかで闘病を続けられ、いつか長嶋監督のあの情熱溢れる笑顔を、また見ることが出来る日がくることを一ファンとして祈りたいと思います。